

新型インフルエンザ

昨年秋、厚生労働大臣政務官を拝命して1年余り、この11月2日をもって、無事、退任いたしました。政務官としての最後の仕事が「鳥インフルエンザ対策」となりました。

10月末、カナダで鳥インフルエンザ対策の国際保健大臣会議が開催され、出席してきました。これまで、アジア地域で発生していた鳥インフルエンザが、この秋、ヨーロッパに拡大し、世界的に大流行するのではないかと、との懸念が一気に高まったからです。

インフルエンザウィルスには、A、B、Cの3種類がありますが、問題となっている鳥インフルエンザウィルスは、A型のH5N1型と呼ばれるウィルスです。今から8年前、香港で発生、鳥から人に感染しました。感染者は18人、そのうち6人が死亡したため、このウィルスに感染し、発病すると致死率が高いことが分かりました。その後、これまでに、ベトナム、タイ、インドネシア、カンボジアなどで、人への感染者が報告されていました。

最近になって、そのH5N1型鳥インフルエンザがヨーロッパに飛び火したことから、WHOが世界的に大流行する可能性があるとして警告、各国に速やかな対応を求めました。ただ、鳥から人への感染例は報告されていますが、それが人から人へ感染した例はまだありません。しかし、インフルエンザウィルスは、大変、変異しやすく、人から人への感染力をもった新しいウィルスへの変異の可能性は否定できません。これまでのインフルエンザは人が経験しており、ある程度、免疫力が働き重症化することは少ないわけですが、H5がもし人から人へ感染する新型ウィルスに変異した場合、世界的規模の新型インフルエンザの大流行（英語では、パンデミックと呼ばれています）が心配されます。そこで、国際的な協力体制をとろうということとなったわけです。

パンデミックといえば、今から90年ほど前の「スペイン風邪」が有名です。1918年5月末、マルセイユで当時の新型インフルエンザ（A型H1N1型だったそうです）が流行し始めました。ちょうどその頃、ヨーロッパは第一次世界大戦の終盤、西部戦線で戦っていた英仏米、そしてドイツ軍兵士の間で蔓延してしまいました。インフルエンザによる被害は甚大で、戦争の行方にも大きく影響したようです。このスペイン風邪によって、世界中で4000万人が死亡したとされています。また、日本でも30万人を超える死亡者が出たとされています。

10月末、私がカナダから帰国後、直ちに厚生労働省に「新型インフルエンザ対策推進本部」が設置されました。対策本部は、抗ウィルス薬の備蓄やワクチンの検討を進めることとともに、11月14日には、新型インフルエンザが発生した場合の行動計画を公表しました。WHOが各国に示したチェックリストを基に、流行の状況を「1」～「6」までの6段階に分け（「6」が大流行）、それぞれ「国外発生（A）」と「国内発生（B）」とに分けて状況を整理するとともに、それぞれの状況に応じて、例えば大流行が予想される場合は、大規模施設や興行施設など、不特定多数の集まる活動は原則自粛を勧告したり、学校の臨時休校を要請するなどの対策をとる、こととしています。

90年前のスペイン風邪が流行した時代と違い、医療環境、衛生環境、人々の栄養状態が向上した今日、必要以上に心配する必要はありませんが、しかし万全の体制は取っておかなければなりません。

ところで、インフルエンザワクチンの製造には、鶏卵が使用されます。ウィルスを卵に植え付け、卵の栄養でウィルスを増殖させるのです。そして増えたウィルスを集め、弱毒化してワクチンを製造します。調理師の皆様の料理には欠かすことのできない卵ですが、インフルエンザ対策にも欠かせないのです。